

<平成 28 年度研究発表会開催概要>

日 時:平成 28 年 11 月 10 日(木)15:00～

場 所:ホテルアウィーナ大阪

発表校:大阪市立今津中学校

テーマ:「九州安心院グリーンツーリズムへの旅 ～10年の農泊を振り返って～」

【1回泊まれば遠い親戚、10回泊まれば本当の親戚】

九州・大分県宇佐市安心院町は、作家の司馬遼太郎が「盆地の景色としては日本一」と絶賛した風光明媚な純農村地帯でブドウ・ワイン・お米の産地として有名である。

この安心院町への修学旅行は平成 16 年から始まり昨年(平成 27 年)まで連続 12 年間続いている。

安心院への農泊の修学旅行が始まったきっかけについては、最初の企画が 15 年前になるので詳しいことはわからないが、12 年間も続いているのは受け入れ先の安心院町グリーンツーリズム研究会の存在が大きい。

大阪市内にある本校の生徒はいわゆる「都会っ子」であり、野菜はスーパーで売られているものしか目にするのではないし、魚とりや蟬取りをするような場所も少ない。

学年の修学旅行の目標設定から、そのような環境にいる生徒たちに「豊かな自然の中で様々な体験をするとともに、地元の農家の方々とあたたかな心のふれあいを経験させたい」という教師集団の思いが伝わってくる。

こういった学校の現状と安心院町が目指すGTの精神がうまく一致したことが、この修学旅行が長く続いている理由ではないかと思う。

【修学旅行の実施要項】

- ・旅行先 大分県宇佐市安心院町
- ・期 日 平成 16 年～平成 27 年 各年度5月中旬～6月中旬の2泊3日
- ・実施学年 第3学年 6学級OR7学級 生徒数 240名～280名
- ・日程概要
 - 1日目:新大阪駅～(新幹線)～小倉駅～(貸切バス)～城島高原パーク(班活動)～安心院町公民館(入町式)～各農家
※平成 27 年度は城島高原パークのかわりに住吉浜でマリンスポーツ体験
 - 2日目:安心院町農業・漁業体験学習
 - 3日目:各農家・漁家(農業・漁業)～安心院町公民館(退町式)～(貸切バス)～小倉駅～(新幹線)～新大阪駅～学校

「九州・安心院グリーンツーリズムへの旅 —10年の農泊を振り返って—

(1回泊まれば遠い親戚、10回泊まれば本当の親戚)

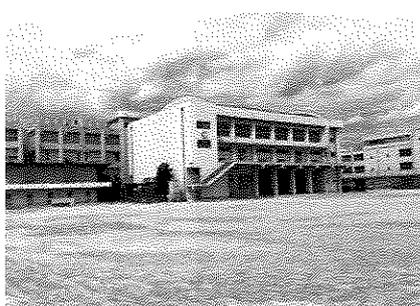
校長 滝川 隆士
教諭 齊部 孝之

大阪市立 今津中学校

●学校紹介

本校は大阪市東部の鶴見区にあり、JR東西線放出駅はなてんより北東へおよそ700mのところに位置している。本校の由来は、昭和40年に大阪府城東区の放出中学校の分校が現在地に開設され、それが昭和45年4月1日に独立し本校の誕生となった。今年で創立46年目を迎える。校区には大阪市立の榎本幼稚園・榎本小学校・今津小学校・汎愛はんあい高校があり、本校を含め5校で連携・協力し様々な教育活動に効果を上げている。

生徒数は680名を超える大規模校で、部活動は運動部が10、文化部が6あり、全校生徒のほぼ8割が参加し活発に活動している。校訓「自主・尊重・努力」の精神の下、生徒は自主性が強く、体育祭や文化活動発表会等の学校行事に積極的に取り組み、活気にあふれている。



学校外観

School Data

【創立年】昭和45(1970)年

【教育目標】

・生徒の願いや実態を把握し、「確かな学力」と「豊かな人間性」を育て、自立した個人として「力強く生きる力」を培う教育活動を推進する。

【生徒数】688名

【教職員数】50名

実施要項

- ・旅行先 大分県宇佐市安心院町
- ・時期 平成16年～平成27年、各年度5月中旬～6月中旬の2泊3日
- ・実施学年 第3学年 6学級or7学級 生徒数240名～280名
引率教員数15名～17名
- ・日程概要

1日目：新大阪駅(新幹線)⇒小倉駅(バス)⇒城島高原パーク[班活動]⇒安心院町公民館[入町式]→

各農家・漁家

(平成27年度は城島高原パークの代わりに住吉浜でマリンスポーツ体験)

2日目：安心院町農業・漁業体験学習

3日目：各農家・漁家[農業・漁業]⇒安心院町公民館[退町式]⇒小倉駅⇒新大阪駅⇒学校

目的地の選定にあたって

九州・大分県宇佐市安心院町は、作家の司馬遼太郎が「盆地の景色としては日本一」と絶賛した風光明媚な純農村地帯でブドウ・ワイン・お米の産地として有名である。

この安心院町への修学旅行は平成16年から始まり昨年（平成27年）まで連続12年間続いている。安心院への農泊の修学旅行が始まったきっかけについては、最初の企画が15年前になるので詳しいことは分からない。ただ12年も続いているのは、受け入れ先の安心院町グリーンツーリズム研究会の存在が大きいと思う。ここで安心院町グリーンツーリズム研究会（以下、安心院町G T研究会）について簡単に紹介しておく。

（NPO法人安心院町G T研究会）

安心院町は日本の農村民泊の発祥の地と言われている。G T研究会事務局という、行政とも協同・連携した組織があり、農村民泊のコーディネーターとして修学旅行等の下見の世話から受け入れ先の農家との調整、教員の巡回車の手配と案内、緊急時の対応など農村民泊に関するおおよそのことを見てくれる。G T研究会が打ち出している安心院方式の農村民泊の特徴は以下の通りである。

- ・一日一組との心の交流で第2のふる里へ
- ・我が子のように迎えます
- ・一家庭一家庭が得意な料理・体験でお迎え

●重点を置いた活動

安心院での農村民泊を通じて、 地域の自然と食と人と深く交流し、心を育てる

- ・一度泊まれば遠い親戚、10回泊まれば本当の親戚
- ・農村民泊発祥の地・安心院で「心のせんだく」を
- ・専属の事務局職員がサポートしています

次に、今津中学校の修学旅行の目標は毎年その実施学年により、少しずつ違っているが、まとめると以下の4つに大別できる。

- ・仲間と協力するとともに、自分の行動に責任を持つ
- ・お世話になる農家の人々とのふれあいを大切にす
- ・農作業などを通して豊かな自然に親しむ
- ・農村という環境に身を置き、自分たちの住んでいる「大阪」を見つめなおす

大阪市内にある本校の生徒は、いわゆる「都会っ子」である。野菜はスーパーで売られているものしか目にするのではないし、川は全てコンクリートの護岸で魚取りの経験を身近ではできないし、蟬取りをするような場所も少ない。おおよそ自然に親しむ環境にはない。また、学校では、精神的な理由からの体調不良で保健室に来る生徒が年々増えており、情緒が安定しない生徒が多い。

上記の学年の目標設定からは、このような環境にいる生徒たちに「豊かな自然の中で様々な体験をすることともに、地元の農家の方々とのあたたかな心のふれあいを経験させ

たい。」という教師集団の思いが伝わってくる。

こういった学校の現状と安心院町が目指すG Tの精神がうまく一致したことが、この修学旅行が長く続いている理由ではないかと思う。

事前学習

今回の目的地である安心院町には、10回以上お世話になっているということもあり、過去の先輩たちの体験や感想を伝えることにより、具体的に農村民泊体験を想像させ、親近感を持たせた。

普段、都会では経験できない自然とのふれあいや各農家の方と心と心の絆を結ぶといった、農村民泊体験の意義を説明し、安心院のG Tの取り組みや想いを伝えることにより、生徒たちが、主体的に農村民泊体験が行えるような取り組みを総合・学活の時間を用いて行った。そして、自己紹介のプロフィールを作成し、農家の方へ事前に送ることにより、お世話になるという心構えを養い、農村民泊する家庭に掲げてもらう旗も作成した。

また、新幹線やバスでのマナーや各農村民泊宅での服装やマナーなどに関した学習も行い、失礼のないように努めた。

活動内容

修学旅行初日は、午前7時頃に新大阪駅に

集合し新幹線で小倉に向かい、そこからバスに乗り換え、午後2時頃に別府市の山手にある城島高原パークに到着した。そこで遊園地の乗り物を中心に、友達同士で2時間ほど時間を過ごす。東京DLや大阪のUSJと違い、人も少なく地方のんびりとした遊園地であるが、生徒たちは十分に満足していた。夕方、農村民泊地の安心院町に到着した。

入町式では受入家庭とその家庭でお世話になる生徒が対面で座り、学校・GT研究会事務局それぞれの代表挨拶の後、各家庭の紹介と顔合わせを行った。10年目の平成25年には、入町式で花火の打上やGT研究会事務局から「親戚の証」が贈られ盛大に出迎えていただき、学校側も生徒代表による安心院を紹介した漫才で応え、大いに盛り上がった。

2日目は、農業あるいは漁業体験である。農業では田植えや野菜の植え付け・収穫、肥料まきや脱穀、藁細工と様々な作業をし、中にはブドウの種付を経験した生徒もいた。漁



農業体験(田植え)



農業体験(ジャガイモの収穫)



入町式の様子

業は朝早くから漁に出、釣竿や網で様々な魚類を収穫し、大満足であった。中には周防灘に面した広大な干潟でマテ貝取りに熱中したグループもあった。「都会っ子」の生徒たちには新鮮で珍しい経験ばかりだったと思う。巡回指導の引率教諭は、生徒たちが学校とは違う生き生きとした表情で、のびのびと活動している姿に、毎年感動させられている。

作業の後、生徒たちは各家庭から宇佐市にある観光地(宇佐神宮、東椎名の滝、地獄極楽の洞窟など)や土産物購入に連れて行ってもらった。そして、夜にはホタル狩りへ。真っ暗闇の中での無数のホタルの乱舞に、生徒たちはびびくりし、その美しさに感動していた。そして、大分といったら温泉。家風呂だけでなく、地域の温泉にも連れて行ってもらい大いに満足していた。さらに、豊かな自然体験と共に生徒たちが楽しみにしていたのが、食事である。ファーストフードに慣れた都会の子にとって、自分の所で取れた米や取れたての野菜を使つてのスローフードは何よりのごちそうであったようだ。みんなで一緒に食事やお菓子を作ったことも、とても楽しい思い出になった。

豊かで優しい安心院の風土と人が、生徒たちを大らかに包み込み、心をのびやかに開放してくれた。まさに「心のせんとく」であ



マテ貝採り



漁業体験

り、全ての経験が生徒たちにとってかけがえないものとなった。

3日も午前中は農業や漁業体験をし、昼には退町式のため町の公民館に集まった。退町式では生徒のお礼の言葉の後、受入家庭の方々も含め全員で記念撮影をした(この写真が卒業アルバムの見開きに載る)。いよいよ別れの時、生徒たちはもちろん受入家庭の方々も目頭を押さえて別れを惜しむ姿があらこちらで見られた。受入家庭の方々はバスで去っていく生徒たちを必死で探しながら、手を振り続けておられた。2泊3日という短い期間であったが、生徒たちは「第2のふる里」として、安心院の方々と心の交流を深めたようだ。

また今回の農村民泊で生徒たちが声をそろえて言ったことが、「家族みたいに接してくれた」という言葉であった。生徒たちは日頃は塾や部活だと忙しく、一人っきりでご飯を食べることも多くなっているのかもしれない

い。そんな中で今回、ご飯をみんなでワイワイと作り食べたことが、すごく楽しかったようだ。改めて、家族の大切さを認識したのではないだろうか。その日の夜、無事大阪に戻り、今回の修学旅行を終えた。

以下、生徒の感想文の一部である。

「○○さんと会ったときは超緊張した。でも『緊張も遠慮もいらんよ』って言ってくれて、ほんまにうれしかった。車からの景色もすごい。みんなと『トトロ出てきそうやな』って盛り上がった。○○さんの家、きれいやし、でかいし、圧倒された!! 温泉連れてってもらって気持ちよかったあ。そして夜のご飯の美味しさ!! てるちゃん(受入農家の方) いっぱい作ってくれたけど完食:。:。」

(中略)

この修学旅行、最初は乗り気じゃなかったけど、行って分かった。先輩らが泣く理由も、今中がここを続ける意味も。帰ってくる時、ちょっとは自分はいろんな体験で成長したんちゃうかな? って思った。この思い出忘れへんし、また来たい!!」

「最初はちゃんと受入家庭の方と仲良くできるのか、どんな方なのか……すごく不安でいっぱいでしたが、すぐに打ち解けることができました。お家についた時おばあちゃんが温かく『おかえりー! 遠いのによく来たね!』と言ってくれたからです。でもあつと



お別れの様子

いう間に最後の日になり、おばあちゃんと喋るのも、おいしいご飯を食べるのも最後だと思つと、悲しく

なり涙が落ちそうになつたけどぐつとこらえました。するとおばあちゃんが泣いたので、こらえていた涙とあふれる思いが出てしまひました。するとおば

あちゃんが力強く抱きしめてくれて『幸せになるんよ』と言ってくれ、涙が止まりませんでした。あの時の言葉は一生忘れません。また△△さんの家に行きたいです。つていふか行きます。」

修学旅行を終えて

修学旅行後、学校では安心院の修学旅行をテーマに俳句を作り校内文化祭で掲示するとともに、安心院町GT研究会主催の俳句大会(「平成の芭蕉・山頭火を目指そう」)にも応募する。修学旅行の思い出を、心のスケッチとして、中学生の感性で表現している。

「強がりの 別れの涙 雲の峰」(平成23年)

「手のひらに 集めた蛍 輝いて」(平成26年)

12年続いているこの安心院町への農村民泊の修学旅行であるが、安心院町が第2のふる里となっている生徒もいるようだ。受入農家の方の中には、修学旅行後の夏休みに家族と一緒に訪ねてくれる生徒や卒業して大学生となり再訪してくれる生徒がいたり、嬉しそうに話される方もおられた。本校と安心院町の皆さんとの強い結びつきを感じる。

そして、生徒自身は意識していないようだが、この修学旅行は、生徒たちが「本当の豊かさ」や「家族の温かさ」ということを感じる、貴重な体験となっているように思う。

まとめ

この修学旅行が始まった頃は、同じ修学旅行を繰り返すことへの批判や、受入家庭によって食事に関する不満などがあつたと聞いている。しかし、教員や生徒にアンケートを取りながら安心院町GT研究会を通じていろいろ問題を解決していく中で、この修学旅行は今津中学校の伝統として根付いてきたようである。何よりこの修学旅行を経験した生徒たちが、この修学旅行の一番の応援団となっている。先輩の話聞いた後輩たちは、次は自分たちが経験する番だと心待ちにしているようだ。

今後、違う方面、違った内容の修学旅行を企画するのであれば、生徒たちがこれまで以上の満足を得るものにする必要がある。なかなか難しいことであろう。